

발표 1

일본의 양봉현황

카이 사토시 총장(나카무라가쿠인대학)

日本の養蜂状況

昭和60年代以降は、土地の開発がより進み、自然環境が激変した。野山では少なくなった花を求めてミツバチが農地へ行けば、農薬との接点が多くなり、影響を受けざるを得ません。その農地での耕作状態も大きく変化し、昭和30年代に比べ、かつての主要な蜜源の栽培面積はレンゲでは30%以下に、ナタネではわずか3.4%にまで激減しました。安価なハチミツの輸入が急増し、国産ハチミツの価格が低迷する中、養蜂家の高齢化が進み、昭和60年には飼育戸数が6,499戸でしたが、平成19年には4,868戸まで落ち込みました。ハチミツの輸入量は、平成24年には約40万トンにのぼり、国内流通量は約2.6万トンにとどまっており、ハチミツの国内自給率は6%程度です。

最近では、国産の農産物が見直されるとともに、国産ハチミツの価格が上昇傾向にあることや、自然との接点が希薄になっている都市部での養蜂が注目されたことから、ミツバチへの関心が高まり、飼育戸数は平成23年には5,790戸と増加傾向にあります。が、一方で蜜源植物の植栽面積は、引き続き減少しており、蜂場の確保に関するトラブルが急増しています。

また、生食の消費量が世界一のイチゴ栽培をはじめ、メロンなどの農産物の花粉交配でのミツバチの重要性はますます増えています。今や、花を訪れることで行う受粉が農産物生産の35%を支えており、家畜としてのミツバチの総産出額は3,500億円にのぼっています。このうち98%が花粉媒介用のミツバチの働きです。

このように養蜂の環境が大きく変化したことを受け、養蜂振興法が改正され、平成25年（2013）1月1日から施行されました。大きな改正点は、蜂群の適正な管理と配置、養蜂の届け出義務対象者の拡大、蜜源植物の確保です。

新しい環境保全、生態系保全のうねりの中でミツバチの重要性は、これからも、一層増していくことになるでしょう。

養蜂をめぐる情勢

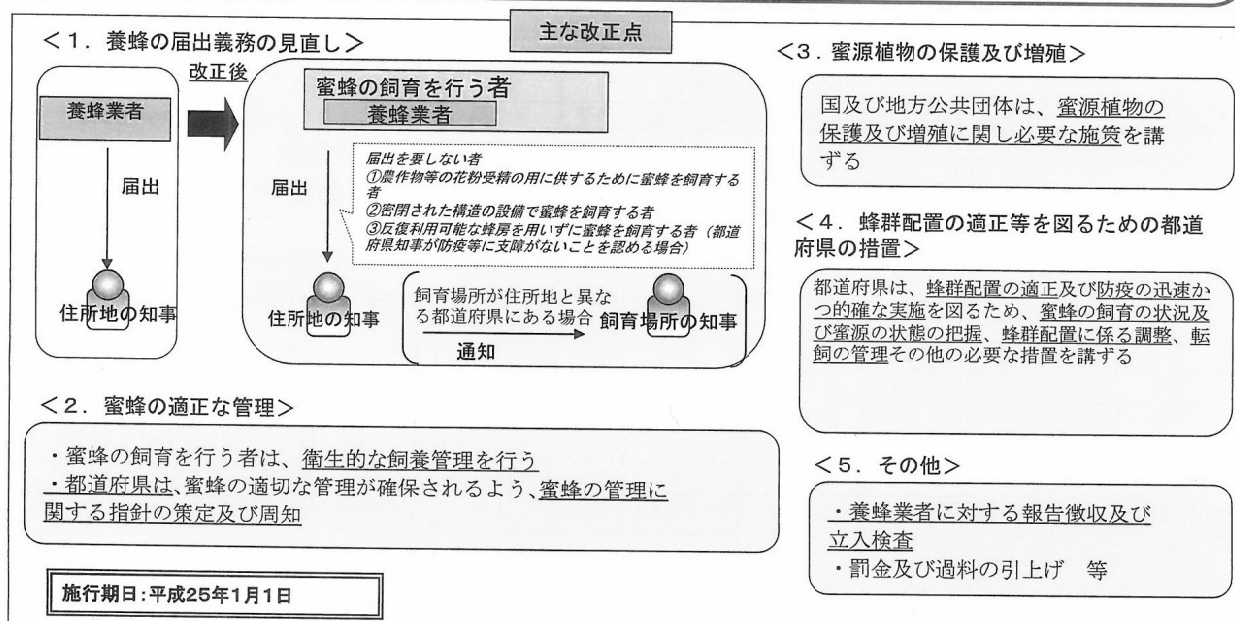
○ 養蜂振興法の一部改正について	1
○ 蜜蜂の飼育動向	2
○ 蜂蜜の需給	3
○ 蜂蜜の流通	4
○ 蜂蜜の種類等	5
○ 蜜蜂製品の生産額等	6
○ 転飼について	7
○ 蜜蜂の転飼状況	8
○ 施設園芸等における花粉交配用蜜蜂の利用状況	9

平成25年9月

農林水産省生産局畜産部

養蜂振興法の一部改正について

- 趣味養蜂の増加や蜜源の減少により、蜂場をめぐるトラブルが増加する等の問題を踏まえ、平成24年6月に議員立法により養蜂振興法を改正。
- 法改正では、養蜂の届出義務を趣味養蜂にも拡大。蜜蜂の適正管理のため、都道府県による蜜蜂の管理に関する指針の策定・指導、国等による蜜源植物の保護・増殖のための施策の実施等を追加。



蜜蜂の飼育動向

- 蜜蜂の飼育戸数及び蜂群数は平成22年以降増加で推移。(平成25年以降、届出義務を趣味養蜂にも拡大。)

- 平成25年の蜜蜂の飼育戸数は8,314戸、蜂群数(※)は203.7千群。
(※ 蜂群数は1月1日時点の調査で、夏期には増殖等で2倍以上になる。)

- 蜜源植物の植栽面積は減少傾向で推移。平成24年は149.6千ヘクタール。

蜜蜂飼育戸数、蜂群数の推移

(単位:戸、千群、群/戸、%) ※

区分	S60年	H2年	H7年	H12年	H20年	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年
飼育戸数	9,499	8,281	7,235	5,342	5,018	4,983	5,353	5,790	5,934	8,314
(対前年比)	96.1	96.5	102.6	96.9	103.1	99.3	107.4	108.2	102.3	—
蜂群数	285	253	214	184	173	171	175	184	184	204
(対前年比)	97.8	97.9	97.2	97.7	95.8	98.8	102.7	105.2	99.9	—
平均蜂群数	30.0	30.6	29.6	34.5	34.4	34.3	32.8	31.9	31.1	24.5

資料:畜産振興課

各年とも1月1日現在

※ H25年は改正養蜂振興法に基づく届出数。

蜜蜂飼育戸数等の上位10県(H25年)

(単位:戸、千群、%)

区分	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
飼育戸数	長野	和歌山	鹿児島	静岡	愛知	福島	岐阜	群馬	埼玉	岡山
戸	657	446	380	350	325	293	291	284	272	262
%	7.9	5.4	4.6	4.2	3.9	3.5	3.5	3.4	3.3	3.2
蜂群数	長野	和歌山	熊本	沖縄	福島	福岡	鹿児島	埼玉	岐阜	北海道
千群	12.5	11.5	10.2	9.4	8.7	8.3	8.1	6.9	6.7	6.3
%	6.2	5.6	5.0	4.6	4.3	4.1	4.0	3.4	3.3	3.1

資料:畜産振興課調べ

H25年1月1日現在の調査

蜜源植物の植栽面積の推移

(単位:千ヘクタール、%)

区分	S60年	H2年	H7年	H12年	H20年	H21年	H22年	H23年	H24年
みかん	143.7	100.4	87.6	78.4	53.8	55.0	52.8	52.3	44.8
れんげ	21.9	18.1	15.7	25.6	13.8	13.2	13.5	11.9	12.8
アカシア	7.6	9.1	3.5	10.3	6.8	5.9	7.1	9.3	8.6
りんご	45.2	46.3	35.5	34.6	27.8	25.2	6.3	23.8	23.3
その他	152.3	129.4	117.9	101.6	67.2	59.6	58.8	70.3	60.1
合計	370.7	303.3	265.2	250.5	169.4	158.9	138.9	167.3	149.6
(対前年比)	97.0	90.3	95.0	102.7	97.2	93.8	87.2	121.1	89.2

資料:畜産振興課調べ

各年とも1月から12月に蜜源として利用した植栽面積

注:表中の数値は、各都道府県で把握しているものを集計。

なお、一部県の調査中止や調査再開もあり、数字の連続性はない。

2

蜂蜜の需給

- 蜂蜜の生産量は、蜜源植物の減少やアルファルファタコゾウムシによる被害等により減少傾向で推移してきたが、近年は横ばい。

- 輸入量は、平成2年頃の蜂蜜入り飲料需要により急激に増加したものの、その後は減少傾向で推移し、近年大幅な増減は見られない。

なお、輸入相手国としては、中国が28,763トンで全輸入量の約78%。

- この結果、平成24年の国内消費量は39,568トン(対前年比91.9%)、自給率は6.8%。

蜂蜜の生産量、輸入量及び消費量の推移

(単位:トン、%)

区分	S60年	H2年	H7年	H12年	H20年	H21年	H22年	H23年	H24年
生産量	7,225	4,854	3,362	3,024	2,838	2,656	2,639	2,664	2,763
輸入量	28,047	69,435	39,200	40,077	41,682	36,919	39,950	40,564	36,823
うち中国	18,143	59,651	35,138	36,754	35,276	29,593	32,386	31,520	28,763
%	64.7	85.9	89.6	91.7	84.6	80.2	81.1	77.7	78.1
輸出量	—	13	77	10	96	47	33	215	18
消費量	35,272	74,276	42,485	43,091	44,424	39,528	42,556	43,053	39,568
自給率	20.5	6.5	7.9	7.0	6.4	6.7	6.2	6.2	6.8

資料:貿易統計(輸入量、輸出量)、畜産振興課調べ

蜂蜜生産量の上位10県(平成24年)

(単位:トン、%)

区分	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
	北海道	長野	熊本	秋田	青森	和歌山	愛知	静岡	山形	鹿児島
生産量	521.9	229.9	194.7	180.4	155.3	109.9	99.2	92.2	88.1	84.3
%	18.9	8.3	7.0	6.5	5.6	4.0	3.6	3.3	3.2	3.0

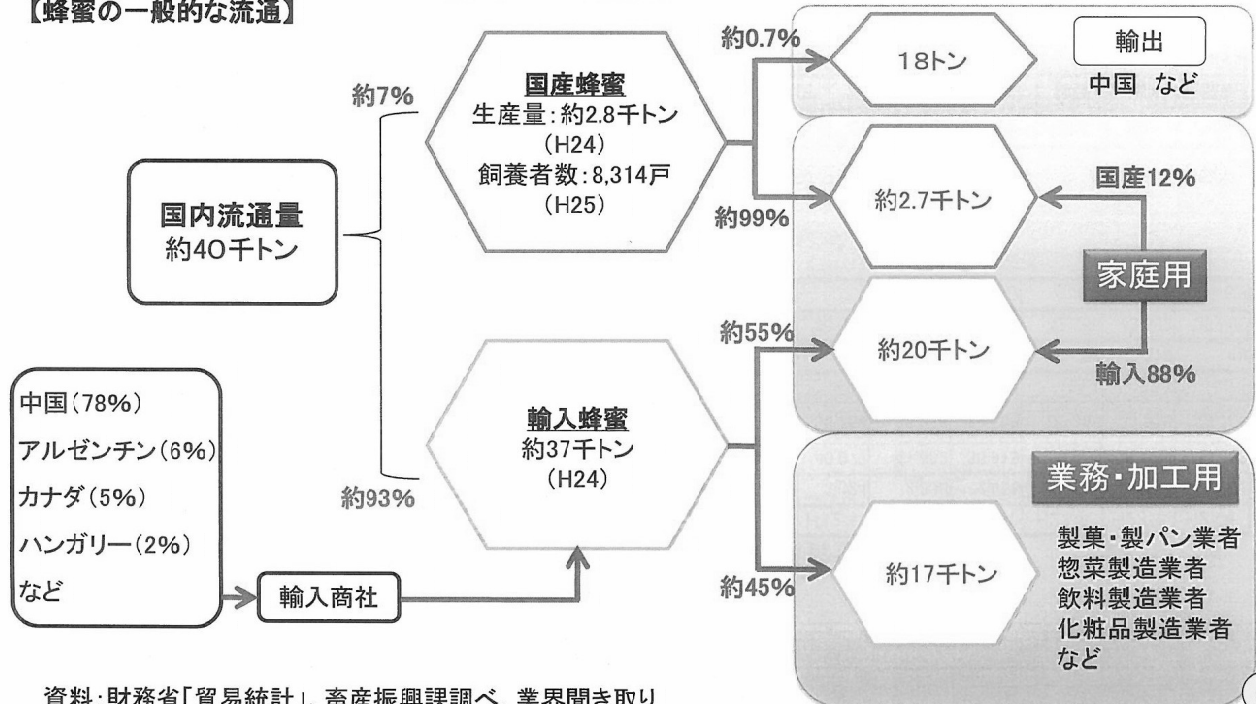
資料:畜産振興課調べ

3

蜂蜜の流通

- 蜂蜜の国内流通量は、約40千トンで、うち国産が約2.8千トン、輸入が約37千トン。輸入はちみつの78%は中国産。
- 国産蜂蜜のほぼ全てが家庭用仕向け。輸入蜂蜜は約55%が家庭用、約45%が業務・加工用仕向け(製菓・製パン、化粧品等)。

【蜂蜜の一般的な流通】



資料:財務省「貿易統計」、畜産振興課調べ、業界聞き取り

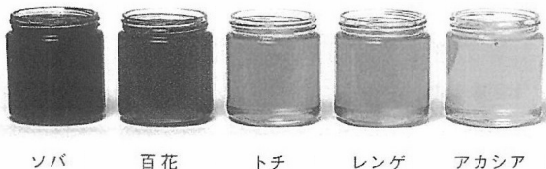
4

蜂蜜の種類、色、価格

- 蜂蜜の種類は、蜜源の花により分類され、アカシアの花の蜜からはアカシア蜜、レンゲの花の蜜からはレンゲ蜜が取れる。
- 蜂蜜の色は、蜜源の花の種類によって淡黄色から黒褐色まで様々。
- 価格については、国産、輸入では生産コストの違いにより、中国、東南アジア産蜂蜜と国産には相当程度の価格差が存在。

種類・色

いろいろなちみつがあります



価格

・国産蜂蜜卸売価格

1,000円/kg～2,300円/kg

※(社)日本養蜂はちみつ協会聞き取り

・外国産蜂蜜価格

平成24年	数量(t)	価額(千円)	CIF価格 (円/kg)	課税後 (円/kg)
合計	36,823	8,407,618	228	287
中華人民共和国	28,763	5,035,871	175	220
アルゼンチン	2,213	584,421	264	331
カナダ	1,656	621,105	375	471
ハンガリー	827	380,683	460	578
ミャンマー	724	105,737	146	183
ニュージーランド	632	775,809	1,228	1,541

出典:財務省「貿易統計」 ※天然蜂蜜の関税率は25.5%

5

蜜蜂製品の生産量・生産額

- 蜜ろうの生産量は、減少傾向で推移。

蜜ろうは、蜜蜂の巣を構成する蠟で、働き蜂の腹部にある蠟線から分泌される。ろうそく、ワックス、化粧品、クレヨン等の原料として使用される。

- ロイヤルゼリーの生産量は、減少傾向で推移してきたが、平成24年は増加。

ロイヤルゼリーは、女王蜂や女王蜂となる幼虫のエサとして働き蜂が分泌する。健康食品として利用される。

- 蜂蜜及び蜜蜂製品の生産額は、推定85億円。

蜂蜜以外の生産物の生産量の推移

(単位:kg)

	S60年	H2年	H7年	H12年	H20年	H21年	H22年	H23年	H24年
蜜ろう	159,081	85,278	67,990	48,527	38,087	30,047	31,578	30,909	25,712
ロイヤルゼリー	12,473	8,356	6,094	4,035	3,452	3,392	3,103	3,400	3,898

資料:畜産振興課調べ

蜂蜜・蜜蜂製品の生産額(平成24年)

種 類	生 産 量	単 価	生 産 額
蜂蜜	2,763トン	2,000円/kg	5,526百万円
ロイヤルゼリー	4トン	150,000円/kg	600百万円
蜜ろう	26トン	1,000円/kg	26百万円
花粉交配用蜜蜂 *	132千群	18,000円/群	2,376百万円
合 計			8,528百万円

資料:畜産振興課調べ、単価は(社)日本養蜂はちみつ協会から聞き取り

*花粉交配用蜜蜂の単価は、いちごの花粉交配用(3～4枚の巣板を1群として使用)を参考とした。

注:表中の数値は、各都道府県で把握しているものを集計。

6

転飼について

- 転飼とは、レンゲ・アカシア等蜜源植物の開花期にあわせ、蜜蜂を移動させて飼育し、採蜜を行う養蜂を言う。各都道府県では、蜜源の利用に関して養蜂業者間で混乱を招かぬよう、あらかじめ場所や期間等を申請させ、調整を実施している。

県外からの転飼

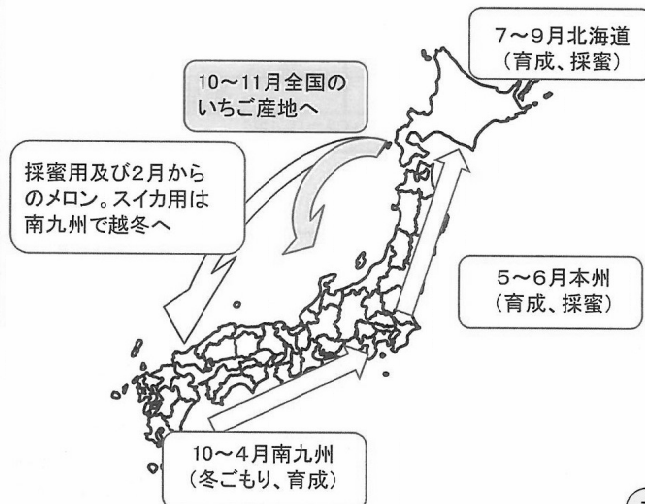
- ・ 県境をまたぐ移動の場合、「養蜂振興法」第4条に基づき、事前に移動先の都道府県知事の許可を得なければならない。

- ・ 許可の申請は、基本的に移動する2ヶ月前までに、

- ①住所及び氏名
 - ②蜂群数
 - ③転飼しようとする場所及び期間
- 等を記載した申請書を移動先の都道府県知事に提出する。

県内における転飼

- ・ 都道府県内における転飼は、都道府県が条例や指導基準等により調整するものである。



7

蜜蜂の転飼状況

- 蜜蜂の転飼は、蜂群の減少等に伴い減少傾向で推移していたが、平成23年以降はやや増加。
- 平成24年は、県外からの転飼申請2,690件、139,777群に対して、許可は2,688件、139,677群。県内における転飼の申請4,138件、131,542群に対して、許可は4,120件、130,058群。

蜜蜂の転飼状況

区分	県外からの転飼				県内における転飼			
	申請		許可		申請		許可	
	件数	群数	件数	群数	件数	群数	件数	群数
S60年	4,270	215,188	4,261	214,768	6,351	183,799	6,330	182,889
H2年	3,880	193,606	3,876	193,396	6,273	193,621	6,262	193,530
H7年	3,277	166,744	3,274	166,526	5,986	187,365	5,960	187,276
H12年	2,867	144,925	2,865	144,885	5,318	157,731	5,303	157,285
H20年	2,623	133,198	2,613	132,991	4,860	144,692	4,855	144,497
H21年	2,673	135,663	2,667	135,337	4,054	126,066	4,044	125,938
H22年	2,429	123,818	2,427	123,559	3,488	109,317	3,462	107,855
H23年	2,637	134,321	2,635	134,233	3,793	125,424	3,790	125,295
H24年	2,690	139,777	2,686	139,677	4,138	131,542	4,120	130,058

資料：畜産振興課調べ

注1：県外からの転飼とは、「養蜂振興法」第4条第1項に規定された転飼

注2：県内における転飼とは、各都道府県内における転飼

8

施設園芸等における花粉交配用蜜蜂の利用状況

- 施設園芸や果樹等の農家において花粉交配用として蜜蜂を利用。
- 平成21年に問題となった花粉交配用蜜蜂不足は、
 - ①前年(平成20年)夏に、天候不順、ダニ等の被害により、働き蜂の増殖が不十分であったこと
 - ②前々年(平成19年)から、女王蜂の主要供給国である豪州からの輸入が途絶えていたことが主な要因。
- これを受け、平成21年に、蜜蜂安定供給確保のため、各都道府県と協力しつつ、園芸農家と養蜂家の間の需給調整システムを立ち上げ、不足県があった場合、供給可能県の情報を提供し、需給調整を図っており、平成22年以降、花粉交配用蜜蜂の不足問題は起こっていない。

花粉交配における蜜蜂の利用状況の推移

(単位：戸、群)

区分	H20年		H21年		H22年		H23年		H24年	
	農家数	群数	農家数	群数	農家数	群数	農家数	群数	農家数	群数
施設園芸	21,213	72,605	23,167	108,928	26,032	110,747	23,889	99,179	23,348	100,263
(うち、いちご)	(13,519)	(48,764)	(14,582)	(70,034)	(14,472)	(67,677)	(13,132)	(61,295)	(12,394)	(62,417)
施設園芸外										
果樹類	19,128	24,277	17,622	24,350	12,287	22,806	23,794	26,936	23,924	25,510
野菜	2,602	5,615	2,370	11,735	3,343	12,493	1,818	4,731	2,537	5,786
合計	42,943	102,497	43,159	145,013	41,662	146,046	49,501	130,846	49,809	131,559

資料：畜産振興課調べ

注：表中の数値は、各都道府県で把握しているものを集計。

9